

## 研究テーマ

回復期脳卒中患者に対するコンピュータ注意課題の効果  
～受動的注意を指標としたクロスオーバー研究～

## 病院名

医療法人社団健育会 竹川病院

## 演者

○金子菜<sup>かねこしおり</sup>(作業療法士) 飯田志帆(作業療法士) 岩坪結美(作業療法士)  
今大登(作業療法士) 草島美優(作業療法士) 宗形亮介(作業療法士)  
田坂龍太(理学療法士) 小林一樹(作業療法士) 可児利明(理学療法士)

## 概要

### 【研究背景】

当院では、コンピュータ支援による認知リハビリテーションソフトウェアRehaComを導入し、注意障害を含む高次脳機能障害に対する介入を行っている。先行研究では、コンピュータ支援型リハビリテーションは処理速度やワーキングメモリーの改善に寄与する一方、セラピスト主導型介入は遂行機能の改善に有効である可能性が報告されている1)。近年、注意機能は能動的注意と受動的注意という二つの情報処理過程から捉えられている2)が、RehaComの効果を受動的注意の観点から検討した報告は少ない。当院では注意ネットワーク機能を定量的に評価可能な@ATTENTIONを導入しており介入の効果検証に有用と考えた。

### 【研究目的】

回復期病棟に入院した初発脳卒中患者を対象に、RehaComによる注意課題と従来の机上注意課題を比較し、受動的注意に対する介入効果を検討することとした。

### 【研究方法】

2025年に回復期病棟へ入院した初発脳卒中患者を対象に、RehaCom介入(A)と従来注意課題介入(B)をAB群・BA群に割り付けたクロスオーバー試験を実施した。主要評価項目は@ATTENTIONによる反応時間平均値とし、介入前後で評価した。統計解析には線形混合効果モデルを用いた。

### 【結果】

反応時間平均値の変化量において、RehaComと従来介入の推定差は-0.03秒(95%信頼区間:-0.29～+0.23秒、 $p=0.82$ )であり、両介入間に有意差は認められなかった。

### 【考察】

本研究条件下では、RehaComは従来の注意課題介入に対する短期的な上乘せ効果を示さなかった。差が認められなかった要因として、通常介入のみでも改善が得られた可能性、回復期における自然回復や検査学習効果、介入内容・介入量の臨床的近似性、反応時間指標の個人差の大きさが考えられる。本結果はRehaComの無効性を示すものではなく、効果の上乗せを前提とした導入の再検討を示唆するものであると考える。RehaComは課題提示の標準化や反復練習量の確保といった運用上の利点を有し、人的資源や訓練体制を踏まえた活用が求められる。また、受動的注意は環境刺激への即時的反応を要するADL遂行に重要であり、今後は生活行為との関連を含めた検討が必要である。

### 【限界・今後の課題】

ウォッシュアウト期間が短く持ち越し効果の影響を完全に除外できなかった点が限界と考える。今後はADLなど臨床的アウトカムを含め、対象特性による効果差の検討が求められる。

### 【引用参考文献】

- 1) Ha Seong KIM, Kil-Byung LIM, et al.: The efficacy of computerized cognitive rehabilitation in improving attention and executive functions in acquired brain injury patients, in acute and postacute phase. Eur J Phys Rehabil Med. 2021;57(4):551-559.
- 2) Maurizo Corbetta, et al.: The Reorienting System of the Human Brain. From Environment to Theory of Mind. Neuron, 2008, Volume 58, Issue 3, pp. 306-324.